

小学校におけるマンドリンを用いた実践的研究

－ 訪問演奏を企画して－

田中恭平*・鈴木慎一郎**

A Case Study on Mandolin at Elementary School : Hold a Concert at Elementary School

TANAKA Kyohei*, SUZUKI Shinichiro**

キーワード : マンドリン, 小学校, アウトリーチ, 演奏会, 子ども

Key Words : Mandolin, Elementary school, Outreach, Concert, Children

はじめに

本稿の目的は、小学校におけるマンドリンを用いての訪問演奏についての報告を行い、マンドリンのもつ価値・魅力について考察することである。

今日、小学校音楽における鑑賞では、様々な鑑賞教材が取り上げられている。それらを大きく分ければ西洋音楽・日本の音楽・その他の地域の音楽に分類できる。さらに、鑑賞教材において扱われる楽器に着目すると、ヴァイオリンを主として編成されるようなオーケストラにて扱われる楽器が多いことに気づく。ただ、近年ではウクレレやバラライカといった民族楽器も世界の音楽として取り扱われ始めている。とはいえ、こうして鑑賞教材として選ばれた楽器以外にも世界にははるかに多くの楽器が存在していることは確かである。

奥忍、安田香によると、歌唱教材に比して児童の支持を多く得ている鑑賞教材の中で、絶対音楽教材と日本音楽教材は概して好まれないとしている。特に低学年では選曲が標題音楽、実用音楽に偏っていることが、高学年児童にとって学校での鑑賞が少しつまらなくなることに密接な関連がある。そして歌唱教材と関連する教材は好む児童が多いことから他分野の教材をも含めて普段の生活から接触頻度が少ないことに最大の問題が存するとしていると述べている¹。このことから今回の研究では実際に演奏を行い子どもと音楽との接触を図ることとする。

『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』によると、「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習の在り方では、見る視点を加えること・関連教材を駆使することや、同じ題材でも様々な楽器で演奏されたものを聴くことでより子どもたちの音楽への関心が高まるとしている²。

このことから、より子どもたちが広く音楽に触れ、また、多種多様である音楽にさらに興味を持つために本研究ではマンドリンという楽器を用いることにする。小学校音楽教科書では扱われていないものの、バロック時代のイタリアで発祥し、ヴィヴァルディをはじめとし多くの人に親しまれてきた楽器である³。日本においても明治時代から普及し始め、今では日本が一番の愛好者人数を誇

* 鳥取大学大学院地域学研究科地域教育専攻院生

** 鳥取大学地域学部地域教育学科

っている楽器である⁴。こうしたことから、マンドリンという楽器を用いた教育実践について分析・考察を行う余地があると考え、本研究に至った。

また、今回は訪問演奏という形をとって教育実践を行った。理由としてはアウトリーチと呼ばれる教育手法を参考にし、マンドリンの持つ価値・魅力を分析しようと試みたからである。

アウトリーチ (outreach) とは、「手を伸ばすこと、手の届く距離」という意味であるが、転じて「教育普及活動」などと訳される⁵。内容としては、ミニコンサート、講座、ワークショップなど芸術活動に関わる全ての活動がアウトリーチと呼ばれる。

このアウトリーチの意義としては、今由佳里は、日々CDやDVDの音質は進化しているものの生の演奏を通じて演奏者の息遣い・表情を捉えたり、生の音を五感を通じて聞くことはCDなどではできないことであり重要であると述べる⁶。安田美香は、アウトリーチの授業を通して子どもたちには、「感心、感動」「満足、喜び」「発見、理解」「意欲、要望」という4つの内的変化が子どもたちに起きたと述べる⁷。河添達也・小川彩由子は、アウトリーチを通じて鑑賞の授業に対する子どもの姿勢に主体性が見られるようになったことを指摘する⁸。

以上の通り、アウトリーチの実践では、教育効果が高い点が明らかにされる。しかしながら、用いられた楽器は教科書に掲載されている楽器が中心で、マンドリンを使用した実践は少ないように思われる。こうしたアウトリーチによって起こる変化がマンドリンを用いた演奏でも観察することができれば、マンドリンの持つ価値を見出すことにつながるだろう。そこで、本稿では、鳥取大学附属小学校においてマンドリンを用いた訪問演奏を企画・実践をし、子どもの意識に着目しながら実態を明らかにする。

1. マンドリンを用いた訪問演奏の実践の概要

マンドリンを用いた訪問演奏は、以下の通り実践された。

日時	2014(平成26)年12月15日(月) 13時30分～14時15分
場所	鳥取大学附属小学校音楽室
実践者	田中恭平並びに鳥取大学マンドリンクラブメンバー(7名)
対象学年	鳥取大学附属小学校第3学年(63名)
使用楽器	マンドリン、マンドラ、クラシックギター、コントラバス
活動目標	マンドリンの音に親しみながら、マンドリンの良さを感じとろう
観察方法	ビデオカメラ2台による録画、質問紙調査

訪問演奏で演奏する曲目として、《ハナミズキ》、《カノン》、《放課後の音楽室》の3曲を選曲した。選曲理由として、《ハナミズキ》は、子どもたちが初めてマンドリンが奏でる音を聞く場面である。そこで有名な曲を選ぶことで子どもたちが親しみを持ちやすいと考えた。そして、マンドリンの持つ音色が合う曲を選ぶことで一層興味を持つと考え選曲した。《カノン》は、小学校音楽教科書の鑑賞教材としても取り上げられている曲である。カノンとは同じ旋律を異なる時点から順番に弾いていく形式であり、実際に生で演奏をするということもあり、それぞれの楽器の音を感じ取りやすいと考えた。また、小学校学習指導要領でも記述されているように様々な演奏形態による音楽を聴く

2) 《カノン》 作曲/パッヘルベル 全113小節 二長調

カノンは、『音楽中辞典』では、次のように定義されている⁹。

カノンとは、厳格な模倣による対位法的手法の一種。また、その手法によって作られた楽曲。同一の旋律を複数の声部が一定の時間的間隔をおいて模倣してゆくタイプが一般的である。

パッヘルベル(1653~1706)は、『音楽大辞典』では、以下のように説明されている¹⁰。

ドイツのオルガン奏者・作曲家。当時最もすぐれたオルガン奏者の1人として知られ、鍵盤音楽の領域において、歌唱的性格とヴィルトゥオーソ的正確をもつ南ドイツの様式と、定旋律と結びついた対位法や変奏曲などの中部ドイツの様式を融合したといわれる。

表2 《カノン》

	5-8	9-12	13-16	17-20	21-24	25-28	29-36	37-40	41-44
1st	p			p	a			b	
2nd		p				a			b
Dola			p				a		
Guitar									
Bass									
	45-52	53-56	57-60	61-68	69-72	73-76	77-84	85-89	89-92
1st		c			d			e	
2nd			c			d			e
Dola	b			c			d		
Guitar									
Bass									
	93-96	97-100	101-104	105-108	109-113				
1st		f		g					
2nd			f		g				
Dola	e			f					
Guitar									
Bass									

主な旋律が最初に登場する第5小節から最後の第113小節における主な旋律の動きを示したものが、表2である。すべてのフレーズにおいて1stmandolinが弾いた後に、同じフレーズを2ndmandolinへ、そしてmandolaへと移っていく形でカノンを構成している。アルファベットの変化がフレーズの変化を示し、模倣していく様子を表している。

なお、《カノン》は、教育出版の小学校音楽教科書6年に掲載され、表現と鑑賞の両側面から取り上げられている¹¹。また、筑波大学附属小学校においても実践されている¹²。これらのことから、小学生で取り上げる楽曲として妥当といえる。

3) 《放課後の音楽室》 作曲/ゴンチチ 全 40 小節 ト長調

表3に示した通り、曲としては冒頭において、ギターの2soli(soloの部分)を複数人で演奏することによる主旋律と伴奏で始まる。旋律は主和音であるIの和音から進行が始まり、ゆったりとしたテンポで進んでいく。ギターが暖かく柔らかく響く。第10小節からは、ギターはtutti(同じになる)で伴奏になり、代わりに1stmandolinのsoloによってギターのaの部分と同じ主旋律が演奏される。第18小節からmandolaとmandocelloに主旋律が移り、その後、第26小節から1stmandolinと2ndmandolinに冒頭のaの部分と同じ主旋律を弾く。なお、《放課後の音楽室》は、高等学校「音楽II」の教科書には、器楽アンサンブルの教材として掲載された¹³。

表3 《放課後の音楽室》

	2-9	10-17	18-25	26-36	37-40
1st		a		a	
2nd				a	
Dola			b		
Cello			b		
Guitar	a				
Bass					

2. 訪問演奏の実際

小学校学習指導要領では、第3学年及び第4学年の鑑賞教材を選択する場合の観点として、「楽器や人の声による演奏表現の違いを感じ取りやすい、独奏、重奏、独唱、重唱を含めたいろいろな演奏形態による楽曲」を示し、演奏の魅力を感じ取れるような教材の選択、及び興味をもたせることのできる楽曲の選択が大切であると記される¹⁴。

今回は訪問演奏を生の演奏ということでマンドリンによる演奏及び音に一層親しんでもらうことをねらいとし、また、楽曲においてもカノンといった各楽器の重なりがわかりやすい曲を選ぶことで、子どもはより演奏や楽器に興味をもつだろうと考えた。

表4 訪問演奏の流れ

流れ	奏者	子ども
入室(音楽室) あいさつ 導入(5分)	楽器を布に包み、プレゼントをもってきたことを装う。	
1曲目の説明と演奏(5分) 《ハナミズキ》	アンサンブル	
マンドリンクイズ(3分)	発祥地、歴史について等のクイズ(三択)	正解と思う答えで挙手する。
2曲目の説明と演奏(5分) 《カノン》	カノンの簡単な説明 《かえるの合唱》使用	
楽器体験(15分)	簡単に楽器に触れ、音を出してみたりする。 1人1分30秒。	前から1人ずつ体験してみたい楽器の前に行くor体験したい楽器の周りに集まる
3曲目の演奏(3分) 《放課後の音楽室》		もう一度聴く体勢
感想記入(5分) あいさつ	用紙を配布する	感想記入

ここでは実際の訪問演奏がどうであったのかということを経験と質問紙から述べていきたい。

1) 録画からの考察

後日、テープ起こしを行い、文字化したトランスクリプトを作成した。

ここでは、トランスクリプトから児童の反応が顕著であった場面を抜粋し、考察をしていきたい。まずは、導入の場面で楽器を取り出した時の様子である。

T 今日みんなが見たことも聞いたこともないような楽器を持ってきました。ちなみにこの中に入っているのですが、

C エレキギター、三味線、バンジョー

(楽器を取り出す)



C 見たことある！ハワイ！ウクレレ！インドにありそう！マンドリン！

T この楽器の名前は、よく聞いてね、「マンドリン」って言います。

C マン↑ドリン！無花果の形

T 今日はこの楽器を使って演奏をおとどけしたいと思います。どんな音がすると思うかな？

C 三味線みたいな音。ギターみたいな音。シャカシャカ。

楽器を取り出すと同時に児童が楽器に注目し、各々が思う楽器の名前や雰囲気を感じ取り言葉にしている。実際に楽器を目の当たりにして非常に興味が湧いていることが感じとることができる。

楽器を取り出した時に、顕著であったハワイ発祥である「ウクレレ」と間違えている子どもが多かった。また、インドにありそうといった発言からも似たような諸外国の楽器が混同していると考えられる。ただ、楽器の音色の想像している言葉からは、弦楽器であることを見て理解していることがわかる。

次は、2曲目のカノンを演奏し終えた後の場面である。

T 2曲目の演奏はカノンっていう曲です。

C カノンなら知ってる。

T カノンっていうのはパッヘルベルさんが作曲しました。カノンっていうのは同じメロディーを繰り返しながら演奏するんですけどわかりづらいとおもうのでカエルの歌でやってみようと思います。

C 輪唱！

(《かえるのがっしょう》を三人の奏者が順番に弾く)

T 順番に弾いていくということです。じゃあ今からカノンを演奏します。
(演奏中)



C すげ〜(拍手)

演奏が始まると同時に少し話していた子どもも音に耳をすまし、全員が静かに聴いている様子であり、演奏が終わると同時に自然と起こる拍手、感嘆の声があがった。

2) 質問紙調査からの考察

訪問演奏の後に、子どもへの質問紙調査を行い、マンドリンについての認識、マンドリンによる訪問演奏を経験しての感想などを調査した。調査の対象となったクラスは、訪問演奏を聞いた鳥取大学附属小学校第3学年(63名)である。回答した児童は63名で、回答率は100%である。選択式の回答と自由記述の感想欄を設けた

まず、今回の訪問演奏がどうであったかということに加え、マンドリンを知っていたかどうかについて質問した(表5, 6)。

表5 訪問演奏はどうだったか

	回答数(人)	割合(%)
楽しかった	52	82.5
普通	9	14.3
つまらなかった	2	3.2

表6 マンドリンを知っていたか

	回答数(人)	割合(%)
はい	10	15.9
いいえ	53	84.1

結果としては、知っていた子どもがいることに驚くとともに、マンドリンを知らなかった子どもが多かったことに対し、楽しかったと答えた子どもがほとんどであった。現在の音楽教科書では知ることはない楽器であるが、子どもたちにとってはとても楽しい経験になっていたことがわかる。さらに、次回訪問演奏をするとしたらもう一度聴いてみたいかどうかということも尋ねてみた。

表7 また聴いてみたいか

	回答数(人)	割合(%)
はい	62	98.4
いいえ	1	1.6

表7に示した通り、また聴いてみたいと回答した子どもは、1人を除き「はい」と答えた。そして、訪問演奏で使用した楽器の中でどの楽器がよかったかということも尋ねてみた。

表8 どの楽器がよかったか

	回答数(人)	割合(%)
マンドリン	20	31.7
クラシックギター	18	28.6
コントラバス	25	39.7

結果としては、3つの楽器ほとんど同じくらいの回答数となった。クラシックギターやコントラバスについては、小学校及び高校の音楽教科書でも取り上げられ、日常で目にする機会も多いが、それらの楽器と変わらないくらいマンドリンが良かったと回答した子どもがいた。

このように、楽しかったと答えた子どもが8割あり、また聴いてみたいと答えた子どもの数も98.4%となった。

質問紙の最後に、自由記述の感想欄を設けた。それらの感想をキーワードごとに、「音に関するもの」、「楽器に関するもの」、「演奏に関するもの」、「意欲に関するもの」、「その他」の5つに分類を行った。全部で59件あり、自由記述が2つの分類にまたがった場合は、それぞれでカウントしてい

る。なお、主な感想については以下に列記する。

◇「音に関するもの」(19件, 32.2%)

- ・マンダリンの音が不思議。高かった。
- ・コントラバス音は大きく、一番低かった。
- ・クラシックギターはピアノみたいな音。柔らかくに響いていた。
- ・マンダリンとコントラバスの音が重なってきれいだった。
- ・ピアノ以外にも、3つの楽器で曲を弾いていてすごかった。

◇「楽器に関するもの」(2件, 3.4%)

- ・マンダリンは不思議な形だった。コントラバスはとても大きくて驚いた。

◇「演奏に関するもの」(3件, 5.1%)

- ・マンダリンはカタカタカタと連続で弾いていた。
- ・コントラバスは弓の角度を変えると音が変わっていた。
- ・体を揺らしながら弾いていた。

◇「意欲に関するもの」(8件, 13.6%)

- ・また聴いてみたい
- ・他の曲も聴いてみたい。
- ・クラシックギターに挑戦してみたい。

◇「その他」 (27件, 45.8%)

- ・マンダリンを見ることができて良かった。
- ・音楽が聴けて良かった。
- ・知っている曲だったので一緒に歌ってしまった。
- ・やり方を教えて弾いたことが楽しかった。
- ・マンダリンという楽器を初めて知った。
- ・勉強になった。
- ・マンダリンを弾けて良かった。

「その他」を除くと、最多は「音に関するもの」であり、3割を占め、音の高低やそれぞれの楽器で奏でられる音によって曲が構成されることに気づいていた感想が見受けられた。13.6%を占めた「意欲に関するもの」については、再度の鑑賞を望む声やさらに楽器体験をしてみたいという声があがっていた。5.1%を占める「演奏に関するもの」については、マンダリンの演奏技法であるトレモロに着目した感想やコントラバスの奏法による音色の違いに注目したもの、アンサンブルにおいて息を合わせるための奏者の動きに着目したのが見られた。「その他」に関しては、初めて見る楽器と出会えたことを喜ぶ感想や実際に楽器を体験できたこと、奏者との関わりがあったことが印象に残っていたことがわかる感想が多数あった。

自由記述欄に記載した子どもは、57名である(90.5%)。実践の時間上の都合により自由記述の感想欄には全児童からの感想を得ることはできず、子どもが存分に感想を書く時間を設けることはできなかったことが課題であった。

おわりに

鳥取大学附属小学校において一回きりではあるが訪問演奏と質問紙調査を行った。その結果としては、マンドリンによる生演奏を体験することで、音楽への興味・関心の高まり、音楽を聴くということの楽しさやマンドリンのよさを感じることができたと考える。音を耳で聴きながら、目で見たり、他の楽器と比べたりしながら、音楽を感じ取っていることが質問紙調査の感想欄に表れている。先行研究に示された、アウトリーチ活動の有効性の結果が、マンドリンを用いた実践においても得ることができた。また、楽器特有の静かで繊細な音色のおかげで、子どもたちは耳を澄まして聴いていた。このことはあらゆる場面で聴くという行為が主体的なものであり、何事にも注意して耳を傾ける姿勢につながるものであると期待できる。

今回はマンドリンを用いたものの、他の楽器との演奏や学校側の協力のおかげで訪問演奏を円滑に進めることや多様な子どもたちの反応を観察できた面も大きい。しかし、マンドリンという楽器を一般的な学校側が用意するのは難しく、どうしても外部から招聘し、イベント的なものにならざるを得ないだろう。そこで今後の課題としては、行事ではなく、通常の音楽の授業においてマンドリンを中核において教育実践を展開するにはどのような方法があるのかという点についても研究を進めていきたい。

謝辞

本稿を作成するにあたり、鳥取大学附属小学校教諭の大野桂先生からの協力を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

付記

本稿は、2014（平成26）年度鳥取大学地域学部卒業論文「小学校におけるマンドリンを用いた実践的研究：訪問演奏を企画して」の内容を発展させたものである。また、本稿の一部を日本音楽表現学会第13回（美ら島）大会（2015年、於：沖縄県立芸術大学）において口頭発表を行った。

注

- 1 奥忍・安田香「小学校の鑑賞教材について」『奈良教育大学教育研究所紀要』第11巻、1975年、pp.97-108。
- 2 「「見る・聴く・愛する」力を育てる音楽科学習：《ことば・動き・音》を関連づけて音楽の基礎・基本を育てる」『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』第31巻、2007年、pp.87-90。
- 3 有賀敏文『マンドリン物語』早稲田出版、2003年、pp.29-55。
- 4 同書、pp.198-241。
- 5 林睦「音楽教育におけるアウトリーチを考える：基本的な考え方、歴史的経緯、最近の動向」『音楽教育実践ジャーナル』vol.10no.2（通巻20号）、日本音楽教育学会、2013年、pp.6-13。
- 6 今由佳里「音楽鑑賞教育に関する基礎的研究」『鹿児島大学教育学部研究紀要』第65巻、2014年、pp.49-54。
- 7 安田美香「アウトリーチによる音楽鑑賞教育：1年間の子どもの変化」『学校音楽教育研究：日本学校音楽研究会紀要』第15巻、2011年、pp.210-211。
- 8 河添達也・小川彩由子「鑑賞授業における音楽アウトリーチ活動の実践研究」『島根大学教育臨床総合研究』第9巻、2010年、pp.169-178。
- 9 秋岡陽「カノン」海老澤敏・上郷祐康・西尾信雄・山口修監修『音楽中辞典』音楽之友社、2004年、p.146。
- 10 下中弘編『音楽大辞典』平凡社、pp.593-596。
- 11 新美徳英監修『小学音楽 音楽のおくりもの6』教育出版、2015年、pp.16-17。
- 12 熊木眞見子・中島寿・高倉弘光『子どもの豊かさに培う共生・供創の学び：筑波プランと実践 音楽』東洋館出版社、2004年、pp.115-120。
- 13 三善晃監修『音楽Ⅱ Tutti』教育出版、2006年、p.58。
三善晃監修『高校音楽Ⅱ MUSIC ATLAS』教育出版、2006年、p.16。
- 14 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社、2008年、pp.47-48。

（2015年10月2日受付、2015年10月6日受理）